
巡り回る環。

Irinias

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巡り回る環。

【Nコード】

N7959Z

【作者名】

I r i n i a s

【あらすじ】

とある依頼を請けた青年の、

長い歴史の中では些細な事かもしれない——そんな物語。

※ファンタジーとSFが混ざったような世界です。

※戦闘描写はぶっちゃけ下手です。

※更新はかなり不定期です。何か思いついたら適当に書く程度。

※矛盾点多し。自分で設定を細かく書かない所為ですが、見つけたら教えて下さい。ごめんなさい。

Chapter 0 物語の、始まり。(前書き)

初投稿です。余り小説を書いた試しがありませんので、面白くない
と思った方はすぐにブラウザを閉じて下さい。建設的意見は大歓迎
ですが、悪意だけの意見はお断りしています。

Chapter 0 物語の、始まり。

『何故自分だけがこんな目に遭わねばならない』

人ならば必ず一度は思った事があるはずだ。自分に襲い掛かる理不尽、不条理に対して。

だがいくらそのような事を思おうがこの世に神様なんてモノがいるはずも無く。

次第に『諦め』が生まれて行き、どんな事であろうと大体は受け入れてしまうようになる。

それが自分の『運命』だと信じているからだ。

現実を直視するのがつらく、逃げの道を選んでしまう。

そしてそれは次第にある疑問を浮かばせるようになる。

『自分の生きる意味は？』

もしくは

『自分の生まれて来た意味は？』

だが、いくら考えても答えは浮かばない。

何故ならば、それは死ぬ間際になって分かるモノなのだから――

――抜粋…著者不明 E・C・1784 『アルテミスの川』より

「……まあ、哲学なんて俺の趣味では無いが」

暇潰しに買った本を読み終え、ベッドに投げ捨てる。

そして、椅子から立つと台所で朝の朝食を作り始める。

レシピ通りに鳥肉を焼き、少しアレンジをしてバターを少々入れる。すると、バターの風味と肉の焼けた良い匂いが部屋中に広がった。皿にサラダを乗せ、その上に鶏肉をのせる。

そして、鍋の中にある——昨日の残り物ではあるが、シチューに火を入れた。

メインと野菜、スープが出来上がった事を確認すると主食である買って来た二つのパンを皿の上に乗せる。

そして、テーブルの上には鶏肉のソテーとシチュー、パンと紅茶が置かれ

一人手をあわせて一礼した後食べ始める。朝から食べるものにしては少々重たい気もするが、若い上に男でもある彼にとってはそれ程苦にはならなかった。

10分程で完食し、皿洗いを手早く済ませソファーの上にある長いケースを空けた。

そこにはスナイパーライフル一丁と、二つの拳銃が入っていた。

スナイパーライフル『L96A1』。かつて千年前以上に『イギリ

ス』と言う

今は存在しない国の会社が開発し、最近になって技術復元で作られた新型のスナイパーライフルである。

拳銃の方は『Desert Eagle』、『イギリス』と同年代に存在していたと言う

『アメリカ』の会社が開発した拳銃で、威力は当時世界トップクラスを

誇っていたと言う。『L96A1』と同じく最近になって復元された代物ではある為此れもまた最新クラスの拳銃だ。

『L96A1』を背中に背負い、ホルスターに『Desert Eagle』を入れて

長年愛用している近接武器でもある刀――銘は『燦雲』と言うらしい。

その『燦雲』を腰に差した。

そして、準備が出来た事を確認すると医薬品や非常用食料を鞆に詰め、鞆を手に掲げた。

「さ、お仕事でも行って来るとしよう」

そう独り言を呟き、部屋を出た。無論、誰も返事する事も無いのだが。

階段から降りると、そこには体格の良い大男がいた。書類の山を相手取り、次々と高速でサインをしていく。相変わらずの様子に思わず苦笑してしまう。

「おい、エヌマエル」

そう呼ぶと、大男は椅子から飛び跳ねて、有り得ないモノを見たかのような視線を向けて来る。

「あり得ないッ……！」

お前が部屋から出て来るなんて……世界滅亡の前触れか!？」

「随分な言い様だな。俺とて仕事をしなければ金は減って行く一方だぞ……」

まさか無限に金が出る訳でもあるまいし」

そう呆れたように言い返すと、大男——エヌマエルは得心したような顔になった。

「なるほどな……しかしまあ、丁度良い所に来たな」

「? どういうことだ」

エヌマエルがニヤリといかにも悪い顔をした為だろうか。とてつもなく嫌な予感がした。

「いやな、今から言う依頼を請けられる奴がいらないんだ。
丁度お前ならピッタリだろうよ」

「? まあいい、仕事ならさっさとくれ。
ただし特一級・紙幣一枚か、金貨百枚以上じゃなきゃ俺は請けな
がな」

そう言うと、大男はますます笑みを浮かべ、依頼書を出す。

「さて、まあ説明しよう。今回の依頼者は皇国学院長の緊急要請でな。

『アルテミス』の生徒5名がこの地方で失踪した為、搜索願があった訳だ。だが、今回の依頼はちと厄介でな」

「どう言う風に厄介なんだ？」

『アルテミス』と言う単語に朝読んだ本を思い出したが、すぐに頭の中から掻き消した。

「搜索願を出された直後、その5名の内4名を見つけたんだが。1名は行方不明だと言うし、おまけに帝政の連中が総出で狙っているらしくてな。その学生が重要人物と言う事だろうが……」

「……なるほどな。ってお前、まさか」

大男は正解！と言わんばかりの顔で言い放った。

「まあ、早い話がお前に護衛を頼みたい。

うちのギルドで前衛の連中は総出で依頼を請けちまってるしな。お前しか前衛クラスの 働きの出来る奴がない」

「……おい、俺は奇襲戦闘専門だぞ。正面からの近接戦闘なんざ専門外だ」

「だが、ギルドで統合部直属の上に上級ギルド員の資格もある。

腕も俺が見る限りは確かだ。皇国との関係悪化は避けたい。頼む、怜」

大男が手を合わせて頼むと、怜——今まさにこの依頼を頼まれている青年は、しばし思案した。

怜と言う青年——織立怜は、ギルドに13歳で入り

たった二年で上級ギルド員の資格を獲得した

所謂『秀才』の部類、いや『天才』に入るかもしれないギルド側からすれば稀有な人物だ。

だが、請ける依頼は戦闘スタイルとも関係するのだが、

大抵「暗殺」と言った汚れ仕事しか請けられず、ギルド内では『卑怯者』と呼ばれ

孤立している。だが、ギルド総長であるエヌマエルは彼の才能を一番早くに見出し、以後怜の唯一の友人とも言える人物だった。

だが、それ以外の人間には気を許さずギルドでもパーティーを決して組まず、

依頼も護衛などの仕事は絶対に請けないと言う対人恐怖症に近い状態だ。

それ故に、この依頼を断ろうとしたが——

友人であるエヌマエルの頼みを断る訳にもいかなかった。

「……分かった。ただし、条件がある」

「!何だ!?!」

「依頼主には顔を見せなくても良いと言う事。フードを常に被るし、マスクもするが依頼主にはそれでも良いか聞いて見てくれ。」

暗殺業をこれからも続けるなら顔を知られるのはどの道まずいしな」

そう言うのと、エヌマエルは苦笑し、仕方無いと言うような表情で言った。

「それに関しては問題ない。事前に俺が聞いているからな。」

俺が信頼出来るなら良い、だそうだ」

「ほお、随分評価されているじゃないか」

エヌマエルの手回しの早さに少し驚いたが、まあ長年の付き合いと言う奴だろう。

「お前は俺をどう見てるんだ……」

まあいい、これが依頼主との合流地点だ。探索班が今は警護しているから、

この証書を見せて交代してくれ」

「分かった」

そう言い、証書を受け取ってギルドの出口から出ようとした。

そこへ、エヌマエルが声をかける。

「無事戻って来いよ。今回は帝政の精鋭部隊もいる。お前だから大丈夫だと思うが……」

エヌマエルが珍しく真面目な顔で心配してきたので、またも苦笑し

ながら手を振り――
ギルドの外へ出た。

「……また、無茶しなきやいいが」

エヌマエルがそう呟いたが、誰一人聞いているものはいなかった。

Chapter 0 物語の、始まり。(後書き)

次の投稿は年明けになる・・・ようなならないような。余裕があれば今年中に。

設定集。(前書き)

簡単な設定集です。

設定集。

『巡り回る環における大陸』

千年程前にユーラシア大陸、アフリカ大陸、

オセアニア大陸、南北アメリカ大陸、その他の島が突然

急速に移動を始め、全大陸が接触してその後5百年の間に現在の形となった。

形は十字型のようになっている。

【国名】

『神楽八洲皇国』

大陸東部に位置する大国。千年前には『日本』と呼ばれていた。名門校である『アルテミス』が存在するのもこの国。

『レグラース帝政共和国』

大陸北部から西部にかけて存在する大国。

千年前には『ロシア』と呼ばれていた。

『エルシエント公国』

大陸南部に存在する国。帝政との戦争に敗れ、現在属国となっている。

千年前には『イギリス』もしくは『アメリカ』と呼ばれていた。

『クラッグベルン』

大陸中央部に位置する。

巡り回る環において主要舞台となる自治区。

砂漠地帯であり、傭兵協会や総合ギルドの本拠地が主におかれている。千年前のアフリカ大陸に当たる。

『グラググベルンの詳細』

広大な砂漠が広がっており、各所にはオアシスが存在している。

傭兵協会や総合ギルドの本拠地が存在する為、腕試しに訪れる者も多い。

また、遺跡が数多く存在しており各国の研究者の注目の的でもある。ただし、治安は最悪で各国から第一級危険地帯に指定されている。

主に、この地域を舞台として物語が展開される。

『通貨』

世界共通であり、従来は銅貨が基本だったが現在は紙幣も流通している。

銅貨百枚で銀貨一枚、銀貨百枚で金貨一枚となる。

金貨1枚で千年前の『日本』における『10万円』相当にあたり、紙幣は以下のランクが存在する。

特一級・紙幣…金貨100枚に相当。

一級紙幣…金貨50枚に相当。

二級紙幣…銀貨100枚に相当。

三級紙幣…銀貨50枚に相当。

四級紙幣…銅貨100枚に相当。

五級紙幣…銅貨50枚に相当。

設定集。 (後書き)

物語が進むにつれ追加される予定。

Chapter 1 太陽と熱風（前書き）

第二話。何かそのまま勢いで書いてしまった。後悔はしてないはず。

Chapter 1 太陽と熱風

「暑い……」

そう呟き、水筒の水を飲む。

ここ数ヶ月、巨額の報酬を得てから部屋で本を読む生活しかしていなかった為か、久しぶりの外はまるで地獄のようだった。

あれから——ギルドから出た時はまだオアシスの近くでもあり幾分かマシな環境だったが、ここは何しろ砂漠の真っ只中。

うっかり道を間違えた日には一人寂しく砂漠で干乾びて死ぬ事になる。

「目的地までは、後何kmだ……?」

鞆から小型探索用のマップサーチャーを出す。

最近になって帝政が開発した広域簡単地図を表示する機械で、現在位置と目的位置の座標を入力すると自動的に数値を表示してくれる。

「ざっと3000m……3kmか。後少しだな」

そう言い、マップサーチャーを鞆に仕舞う。

そして再び、歩き出そうとした時だった。

まるで空から巨大隕石でも落ちてきたのかと錯覚する程の轟音と衝撃波が怜の全身を襲った。

「クソッ、何なんだ!」

轟音のした方角はまさに、怜の向かおうとしていた場所の方向だった。

まさかとは思うが———そう思いながら、走り出した。

すると、前方にいきなり大人数の兵士らしき服装をした集団が此方へ向かって来た。数は30名程だろうか。

『我らはレグラーズ帝政共和国の部隊である！

ここより先は封鎖されている！すぐに引き返されたし！』

と、拡声器でこちらに向けて言い放った。

「……いつからここは帝政が取り仕切って良い場所になったんだ」

そう言うのと、部隊長らしき男が一人歩み寄り——怒声を放った。

「傭兵だか総合ギルドだか知らないが、乞食当然の奴らが我らに口を利くとは生意気な！貴様等は命令に従っていればいいのだ！」

部隊長らしき男がそう言うと同時に——俺は、その男を思いっきりぶん殴っていた。

「……何抜かしてんだ。戦争で負けていながら、その無駄なプライドだけは

健在のようだな、帝政のアホどもがッ！」

そう言うと同時に、バックステップをしながらオアシスの武器屋で購入した

手榴弾を4つ、閃光弾を同じく4つ兵士の集団に投げ込んだ。

さすがに熟練の兵士らしく、冷静に対応したのだが——

従来の手榴弾や閃光弾とは違う『衝撃作動式』だった為、兵士達はその手榴弾を蹴り返そうとした途端、爆発した。

すると、雷が落ちたかのような眩い閃光と灼熱の炎のような爆風が兵士達を襲った。

ある者は失明し、ある者は足や腕を吹き飛ばされ、ある者は即死していた。

だが、依然数が多く無傷の者が10名程残っていた。だが、味方がやられパニックに陥っている為か隙だらけだった。

そこへ、ホルスターから取り出した『Desert Eagle』の銃口を

兵士達に向け――引き金を引いた。

二発撃ち、二人の兵士の眉間を撃ちぬいた。

すると、残りの八名はようやく冷静さを取り戻したらしく、こちらに自動小銃を向けて来る。

（チッ、やっぱり近接戦闘は苦手だ）

そう心の中で愚痴を零し、遮蔽物の陰に隠れる。背中のL96A1にカスタマイズを施し、セーフティを外す。その間、僅か1秒。熟練の兵士に劣らぬスピードだった。

まず8名の兵士の内、一番左側の男に向けて照準を定める。自動小銃でこちらに向けて撃ってくるが、自動小銃はしっかり狙わないと

当たらない。そして、兵士達は半狂乱状態に陥っている為弾が当たるはずも無かった。

引き金を引くと、拳銃で撃った時と同じように左側の男の眉間に弾が吸い込まれる。

それを見届けると、煙幕弾を2個兵士達に向けて投げ、逃走する。さすがに不意打ちだけでは本職の兵士には勝てない。そう判断した為だ。

10分程走り続け、兵士達の封鎖網の先へ行くと、そこでは学生の制服らしきものを身に纏った4名と2人の……探索班だろうか。6名が5人に囚われていた。

（恐らく……あれが護衛対象と探索班だろうな。周りにいるのは……帝政の聖典省の騎士と外交官、皇帝直属総隊……！？）
それに、傭兵協会だと！？）

身を隠しながら様子を窺うが、やはりその光景が信じられない。皇帝直属総隊と言えば帝政の中でもエリート中のエリートが選抜されるし、

聖典省の騎士も皇帝直属総隊の騎士に劣らない実力を持つ。そして、外交官の男が何故ここにいるのかも分からなかった。

おまけに、商売敵とは言え傭兵協会まで参戦しているとなると中々に手強い。

だが、躊躇している暇も無かった。背中 of 『L96A1』を構え、差し当たって一番脅威であろう――アサルトライフルを持つ

皇帝直属総隊の騎士を狙う。

そして、引き金を引くと——信じられない光景が目に入って来た。撃った弾は確かに騎士の頭へと当たる……はずだった。

だがしかし、当たる直前に騎士が手を頭の前に突き出すと——高速で回転する弾を『掴んだ』。

そして、全員がこちらに気づき——最悪な状況が、始まった。

Chapter 2 遭遇、そして（前書き）

グダグダやね。相変わらず思いつきだけ。
その内大幅改訂有りかもです。

Chapter 2 遭遇、そして

（何だあの化け物はッ！）

そう思わずにはいられなかった。常人であれば、弾を掴むなんて人間離れした芸当は出来ないのだから。

こうして全速力で走って逃げている間にも敵は距離を縮めて来る。あの化け物染みた男は追ってこず、代わりに騎士の甲冑に身を包んだ聖典省の騎士と、傭兵らしき男が追って来るだけだった。

騎士の武装はそれこそただの剣だが、ただの剣と侮る事無かれ。簡単な魔法陣のような物が刻まれているのだが、現代科学では解明出来ない謎の現象を引き起こす剣だ。

とは言え、炎が剣から出たりはしないし、精々切れ味が良くなるか通常より少し軽くなる程度の剣だ。一応、怜の持つ刀もその部類に入る。

それだけ考えると普通に拳銃で威嚇すれば良いのだが、何しろ走りながら敵に弾を当てるなんて芸当は出来ない。

それに、傭兵の男が後方からサブマシンガンを連射して来る為そんな余裕すらないのが実情だった。

（このままじゃ埒が明かない・・・どうする！？）

そう、怜が思案していると突然砂嵐が辺り一帯を襲った。視界が砂嵐で埋め尽くされ、敵の姿を捉える事も出来ない。

だが、この状況下では怜に有利に働いた。

砂嵐の下で戦闘した事は一度二度では無いし、何より敵が帝政から来たならこの砂嵐の前ではどうしようも無いだろう。

そう判断した怜は手榴弾を遠くに投げた。この状況下で敵が最も敏感に反応するのは『音』だ。

音がすれば、その方向に自然と進むだろう。

そして、先ほどの学生と探索班が囚われている地点へと走り出した。

学生と探索班がいた地点に戻ると、やはり外交官らしき男と銃弾を手で掴んだ男——皇帝直属総隊の男が、周囲を警戒しながらも学生と探索班を監視していた。

『L96A1』を再度構え、今度は外交官の男を狙う。先ほどの砂嵐が少し

此方にも及んでいるが、そんな事に構っている暇は無かった。

怜が銃弾を装填し、引き金を引こうとした時だった。

ドラム缶を撥で勢いよく何度も何度も叩いたかのような音がすると同時に

あの化け物染みた男と外交官らしき男が突然跳躍すると同時に4名程の

集団が銃を撃ちながら突入して来た。

思わぬアクシデントの立て続けで、怜は一瞬驚いたがすぐにホルスターから

『Desert Eagle』を取り出し、自身も学生と探索班達を助けようと動こうとしたが――

「おっと、そこから動いてもらっちゃあ困るぜ、兄さんよ」

背後からいきなり声をかけられ、反射的に銃を背後に向けて撃とうとした。

だが――

バキッ、と木が折れるような音と共に『Desert Eagle』が真っ二つに両断され

宙を舞った。それに一瞬虚を突かれたような形となったが、すぐに腰から

『燦雲』を抜き放ち中段の構えを取る。

「良い反射神経だ。だが、運が悪かったなあ？」

目の前の男――先ほどの傭兵の男だ。歳は20後半と言った所だろうか。

サブマシンガンを片手で持ち、サバイバルナイフをもう片方の手でもっていた。

そして、騎士甲冑に身を包んだ聖典省の騎士がこちらに剣を向けて来る。

「まあ、相手が悪かったな。

いくら何でもこの状況下で勝てると思っではないだろうか？

そこまでバカじゃ無さそうだし、おとなしく投降して貰おうか」

男の言う通りだった。さすがに刀だけでは分が悪すぎる。そもそも、暗殺業を生業として生きて来た自分と

正面からの近接戦闘を経験している本職の騎士とでは全然話にならない。

あくまで怜のスタイルは『奇襲暗殺』

遠くから狙撃し、一撃で相手を即死させるやり方だ。

刀を扱えない訳では無いが、それでもこの状況下では厳しいだろう。

とは言え、ここで捕まったら帝政に対する反逆者として処刑場行きだ。

まだ死ぬ訳にも行かないし、精一杯抵抗する道を怜は選んだ。

「……チッ」

怜が戦う気だと分かると、傭兵の男は舌打ちをしサブマシンガンの引き金を引いた。

だが、弾がいくら引き金を引いても出ない。

恐らく、砂漠の砂で排莢不良を引き起こした為だろう。

それを認識すると、怜は中段の構えから刀を八双の構えへと構え直し、

目の前の男へと斬りかかる。だが、男の寸前で聖典省の騎士の剣に遮られ

そのままバックステップをし、距離を取る。

そして、腰を落として重心を低くし片方の騎士へと斬りかかる前に片手で

砂を大量に掴み、敵に向かって投げつけた。

さすがに兜の中に砂が充満した為だろうか、騎士が兜を投げ捨てた。

すると、そこにはいかにも怜より年下に見える少女がいた。

（こんな歳で聖典省の騎士だと！？）

そう思ったが、口には出さない。歳はいくつであれ、実力は確かだ。すると、もう片方の騎士も兜を捨てた。こちらもうやはり同年代くらいの少女だった。

少し大人びてはいるが、戦闘中に容姿を一々気にしていられなかった。

そして睨み合いの攻防が続くと――先ほどの外交官の男と皇帝直属総隊の騎士が

こちらに向かって来ると同時に、傭兵の男と騎士の少女達もこちらを牽制しながら

距離を取り、一緒に逃げ出していった。恐らく、先ほどの4名程の集団が

救出に成功したのだろう。

敵の姿が見えなくなると同時に怜は緊張を解き、先ほどの学生や探索班、突入して来た集団へと
向かって歩く。相手もこちらに気づいたのか、こちらへ向かって来る。

そして、話しかけようとした途端。

いきなり、一人の男から……剣を、向けられた。

「貴様は敵か、否か。すぐに答えよ、さもなくば斬り捨ててくれる」

一瞬、まったく予想していなかった展開だった為か。返答に窮したが、すぐにエヌマエルから貰った証書を見せて名乗った。

「総合ギルド・統括部所属、織立怜だ。これがエヌマエル総長の証書だ」

すると、学生達以外の全員が驚いたようにこちらを見て来た――

Chapter 2 遭遇、そして（後書き）

誤字脱字、感想などお待ちしております。

Chapter 3 波乱と旅の始まりと（前書き）

グダグダ。キャラ作りが難しいですね

Chapter 3 波乱と旅の始まりと

剣を向けて来た男は口を大きく開けて硬直し——暫くして、言葉を発した。

「織立、と言う事は・・・貴様、《狂犬》か!？」

意外な渾名で呼ばれた。ギルドで常日頃怜が言われている蔑称だが、ギルド関係者以外が知っているとは思わなかった。

「……まあ、そうだな。いつからそんな有名になったのかは知らないが。

で、何でこんな所に公国軍の中将様と公爵親衛隊騎士がいる？

おまけに皇国の宰相府の職員に……学院教授？

今日は帝政やら皇国やら公国のお偉い方のパーティーでもあるのか?」

そう言うのと、目の前の剣を向けている男は顔に青筋を立て、般若のような形相でこちらを睨んで来た。

「き、貴様……」

「ま、まあまあ……ラインリヒ卿、落ち着いて下さい」

そう、隣の公爵親衛隊の女性騎士に宥められるとラインリヒと呼ばれた男は冷静さを取り戻した。

「くっ……まあいい、ギルドからの出向なら無碍にも出来ん。

私はお前の言う通りエルシェント公国軍・中將。ラインリヒエルミネスだ。

宜しくは頼まんがな」

そう吐き捨てる、一歩下がった。

続いて、ラインリヒを宥めていた女性騎士が歩み出る。

「エルシェント公国軍・公爵親衛隊騎士爵。アゼリアエルスティーです。

以後、宜しくお願いいたします——怜殿」

そう一礼すると、ラインリヒに倣い一歩下がった。

続いて、皇国の宰相府の職員らしき男と学院教授らしき少女が名乗った。

「僕は神楽八洲皇国・宰相府第一秘書官。御堂亮介です。

噂はかねがね窺っております、織立殿」

「同じく神楽八洲皇国学院『アルテミス』の特設研究室長。四葉理佳、と申します。宜しくお願いしますね、怜さん」

そう名乗ると、先ほどのラインリヒとは対照的に二人揃って笑顔を向けて来る。

すると、学生達もこちらへ挨拶してきた。

「初めまして、織立卿。皇国学院の第二学年、九条子爵家の九条沙理です。

護衛の方、宜しく願いますね。」

先ほどの亮介と名乗った男や理佳と名乗った少女と同じように、笑って礼をして来る。皇国人は皆こうなのか、と内心思ったが――ある違和感に気づく。

（こいつ、どこかで見たような・・・）

顔になんとなく見覚えがあった。だが、皇国のお嬢様に知り合いなどいるはずもない。

気のせいだと考える事にし、軽く礼をして他の三名を見る。

すると、少年のような顔立ちをした青年が名乗った。

「神楽八洲皇国・皇室近衛隊・第一近接近衛隊長・紺野司です。

さつきは……すみません。助かりました、織立さん」

先ほどの帝政の騎士達の事を言っているのだろう。

自分の非力さに落胆しているようだった。

この先もこんな調子では困るので、軽く励ましの意味で言った。

「……そう落ち込むな。全員が精鋭中の精鋭だ、護りながら動くのは難しい

気にする事は無い」

そう言い、肩を軽く叩く。すると、青年は少し元気を取り戻したのか軽く礼をして下がった。

続いて、沙理と名乗った少女と同年代くらいの少女が名乗った。

「神楽八洲皇国・皇室近衛総隊・第一近接近衛副長・天宮由宇です。

先ほどは有難う御座いました、怜さん。

もう少しで転移装置に放り込まれる所でした……。」

そう言い、こちらに大仰な礼をし下がった。

転移装置が何の事かは分からなかったが、礼を言われているだけだと判断し最後の一人を見た。

そして、心臓がドクン、と跳ねた。

その少女の容姿に余りにも見覚えがあったからだ。

「初めまして、怜さん。皇国第一皇女・水守椎菜と申します。……怜さん？」

「!?! あ、ああ……」

椎菜と名乗った少女に呼ばれ、我にかえった。名は違っていたが——彼の良く知る人物に、似ていたからだ。

（今日はおかしい……二人も見覚えのある奴がいるなんて……おまけに皇女様と子爵家令嬢？ 接点も無い……気の迷いだ）

そう自分に何度も言い聞かせ、無理矢理納得する。

その様子を見た椎菜が首をかしげたが、軽く礼をして下がった。

一通り自己紹介が終わり、探索班と担当交換をし探索班が帰るのを確認した後

ラインリヒが再び怜を睨んで言った。

「おい……貴様、いつまでその不気味なフードとマスクをしている

つもりだ。

失礼だと思わないのか！」

そう怒声を放ち、こちらにフードとマスクを取るよう要求して来る。

「それは無理な相談だ。俺は顔を見せなくても良いと言う条件で契約したんだ。

それが嫌なら俺は契約金はもらないし、契約をいまずぐ打ち切るとしよう」

そう言うと、男が齒軋りをして怜に罵声を浴びせた。

「ふん……所詮ギルドの狂犬か。噂通り変人らしい。

どうせ顔を見せられんのも人に見せられない程醜い顔をしているのだろう」

「ラ、ラインリヒ卿！そのくらいにしてください！怜殿に失礼ですよ！」

アゼリアがラインリヒを再度宥める。

手馴れていることからいつもこのような感じなのだろう。

「グッ……アゼリア殿に免じてこの場は退いてやる……」

それを軽く無視し、怜は全員へ向かって言った。

「これからクラッグベルンを抜けて皇国領内まで歩く。恐らく徒歩で二週間程かかると思うが我慢して欲しい。

途中いくつかの町によって物資補給をしながら進むから日数がかかるが

構わないか？」

そういうと、ラインリヒ以外の全員が首を縦に振り、今後の方針も決まった。

「とりあえずギルドの簡単テントが4つある。

男は紺野殿とイルミネス殿、御堂殿で一つのテントを使用してくれ。

女性陣は好きにしてくれ。夕食はまだ準備が出来ていないからな、少し待ってくれ」

「怜殿はどちらで寝るのです？」

アゼリアがそう言うのと、怜はごく当たり前かのような口調で言った。

「俺が寝る訳無いだろう。護衛は基本的に24時間起きて護衛するのが

ギルドの掟だ」

「「え？」」

全員が何言ってるんだコイツ、みたいな目で見て来た。だが事実怜は任務中には一切寝ていないし、最長で一ヶ月不眠で活動した事もある。

由宇と司が、順に言った。

「……怜さん。常識的に考えて普通敵の監視は交代制です。

貴方一人に負担をかけていざと言う時倒れられては困ります」

「と言うより護衛一人でって無茶ですよ、織立さん……」

「しかし」

「しかし、ではありません。いいですか、しっかり寝る事！
分かりましたねっ！？」

「そうです！僕等が起きている時は絶対にやらせませんよ！」

息ぴったりに捲くし立てる。他の面々も全くだと言わんばかりにこちらを見て来る。

「……分かった。だが、基本的に俺は一人で見張りをするからな。
当番制にするにしろ

組からは除外してくれ」

「織立卿……？」

「これだけはいくらなんでも譲歩出来ん。この通りだ」

手を合わせて頼んで見る。すると、諦めたかのような表情で皆が納得した。

そして、この日から——短くて、長い。そんな旅が始まった。

Chapter 3 波乱と旅の始まりと（後書き）

意見、感想、誤字脱字など募集中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7959z/>

巡り回る環。

2011年12月26日20時57分発行